中学校

平成8年度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成８年度

教育研究員名簿（教育課題）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
進路指導分科会	品川区	城南中学校	松村　進
	世田谷区	希望丘中学校	○ 川越豊彦
	中野区	第七中学校	江草隆之
	豊島区	真和中学校	熊谷淳義
	足立区	江北中学校	小林秀一郎
	江戸川区	松江第四中学校	後藤　哲
	三鷹市	第四中学校	山崎　茂
	調布市	第三中学校	青木宏高
	小金井市	小金井第一中学校	秋野宏之
	稲城市	稲城第五中学校	亀澤信一
生活指導分科会	墨田区	錦糸中学校	稲葉守朗
	大田区	馬込中学校	塩崎一郎
	荒川区	道灌山中学校	◎ 丸山　等
	板橋区	志村第五中学校	小出泰隆
	練馬区	田柄中学校	渡部　治
	葛飾区	立石中学校	谷川公將
	日野市	三沢中学校	横溝照夫
	東久留米市	西中学校	神山信次郎
	多摩市	西落合中学校	古瀬達也
	日の出町	平井中学校	須藤和博

◎　世話人　　○　副世話人

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　　大野容義
多摩教育事務所指導課指導主事　　宮川保之

目　　次

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由 …… 2
「主体的に生きる意欲を高め、積極的に社会参加する生徒の育成」

Ⅱ　進路指導分科会の研究 …… 3
「自らの生き方を主体的に考え、自己選択能力を高める進路指導の充実」
1　副主題設定の理由 …… 3
2　研究の方法 …… 3
(1)　年間指導計画に基づいた授業の工夫 …… 3
(2)　進路センターの活用とその工夫 …… 3
3　研究の構造 …… 4
4　研究の内容 …… 4
(1)　年間指導計画に基づいた授業の工夫 …… 4
(2)　進路センターの活用とその工夫 …… 8
5　研究のまとめと今後の課題 …… 12

Ⅲ　生活指導分科会の研究 …… 14
「自分のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒の育成」
1　副主題設定の理由 …… 14
2　研究の方法 …… 14
3　研究の構想 …… 15
4　研究の内容 …… 16
(1)　アンケート調査から見た生徒の実態 …… 16
(2)　具体的な実践例 …… 17
ア　生徒が役割と責任をもって取り組む学習指導の工夫 …… 17
イ　生活指導の観点を生かした学習指導の工夫 …… 19
ウ　生徒の自発的、自治的な能力や態度をはぐくむ生徒会活動 …… 21
エ　集団の自治活動を導く「話合い活動」 …… 22
オ　ボランティア体験学習 …… 23
5　研究のまとめと今後の課題 …… 24

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由

教育課題研究主題

主体的に生きる意欲を高め、積極的に社会参加する生徒の育成

主題設定の理由

戦後50年、わが国の経済はめざましく成長し、私たちの生活水準を向上させた。また、交通、情報通信システムをはじめとする様々な分野における進展は、私たちの生活をより便利なものにしてきた。反面、人々の生活はあわただしく、心にゆとりをもちにくい状況にある。

このような社会の大きな変化は子供たちをとりまく教育環境も大きく変化させた。子供たちもまた、大人と同様に、物質的豊かさや便利さを享受する一方、日常生活の忙しさからゆとりを失いつつある。

家庭においては、核家族化、少子化が進み、子供たちの人間関係を作る場が減ったことが、子供たちの社会性や自立の遅れの一因となっている。

地域社会においては、地縁的な結びつきや連帯感が弱まり、知識偏重の教育と相まって、子供たちの社会性や倫理観を育てづらくなってきている。こうした家庭、地域社会の教育力の低下は今後も進むと考えられる。

一方、これからの社会は国際化、情報化、科学技術の発展が一層進み、子供たちが社会の担い手となる21世紀は、より変化の激しい、先行き不透明な社会になると思われる。

このため、学校教育においては、自ら学び、自ら考える教育への転換を図り、21世紀の担い手としての子供たちが、この変化の激しい社会を生き抜くため、豊かな人間性をもち、自ら学び、考え、主体的に判断、行動できる「生きる力」を獲得できるよう指導、援助していくことが求められる。すなわち、学校の教育活動を通し、生徒が自ら生きる目標を見いだし、目標実現のために意欲をもって取り組む態度、目標実現のために直面する課題を解決する能力、次代の担い手としてよりよい社会を築いていくために、積極的に社会に参加しようという態度などを育成することが課題となっている。

以上のような社会的背景や子供たちの状況を踏まえ、「主体的に生きる意欲を高め、積極的に社会参加する生徒の育成」という本主題を設定した。

教育課題部会では、進路指導分科会と生活指導分科会とに分かれ、それぞれの視点から自ら学び、考え、主体的に判断、行動できる生徒を育成することに主眼をおき、実践研究に取り組んだ。

進路指導分科会では、年間指導計画に基づいた授業実践と進路指導センターの利用を通して生徒の自己選択能力、自己決定能力を高める方法を探った。生活指導分科会では各教科、特別活動を通して、問題解決能力や自己責任の感覚や行動力を身に付けるとともに、達成感や自己存在感を実感させることによって、自己のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒の在り方を追究してきた。

Ⅱ　進路指導分科会の研究

進路指導分科会副主題

自らの生き方を主体的に考え、自己選択能力、自己決定能力を高める進路指導の充実

1　副主題設定の理由

中学校の進路指導では、生徒が自分の能力や適性を理解し、主体的にそれを生かそうとする「生き方」を見つけていけるように指導、援助していくことが大切である。

そのためには、一人一人の生徒をよく見つめ、理解を深めるとともに、認め、勇気づけ、励ますなど、教育活動全般を通して自己の特性の自覚を促すよう指導することが重要である。

現在、多くの学校が啓発的体験学習を取り入れている。それは、生徒自らが生き方を考え、意思決定する力を育てるために必要な指導の一つとして考えられているからである。その一方、これまで最終学年では進学指導や就職指導といった出口指導に偏りがちであったのも、否めない事実である。さらに、中学校卒業後も、不適応などを理由とした中途退学や転職などの増加が社会問題の一つとさえなっている。

生徒が学力や合格の可能性ばかりにとらわれ、啓発的体験学習における様々な情報活用の体験が、進路選択に当たって十分に生かされていないことがその一因と考えられる。そこで、生徒が自己の特性を理解し、様々な体験や、そこで得られた情報を活用して、自分の生きる道を決定することができるような指導の在り方を工夫する必要がある。また、できるだけ多くの正しい情報を生徒自らが収集・選択・活用することができるような場を意図的に設定する必要もある。

こうした現状を踏まえ、「自らの生き方を主体的に考え、自己選択能力、自己決定能力を高める進路指導の充実」という副主題を設定した。

2　研究の方法

本研究では、生徒の「自己選択能力」「自己決定能力」を高めることをねらいに、年間指導計画に基づいた授業の工夫と、進路センターの活用の二つの実践に取り組んだ。

本分科会では次のような点に重点をおき、研究を進めた。

(1)　年間指導計画に基づいた授業の工夫

ア　年間指導計画の収集と分析をする。

イ　進路に関する実態調査をし、指導上の問題点を探る。

ウ　自己選択、自己決定をする場面を盛り込んだ授業を工夫し実践する。

(2)　進路センターの活用とその工夫

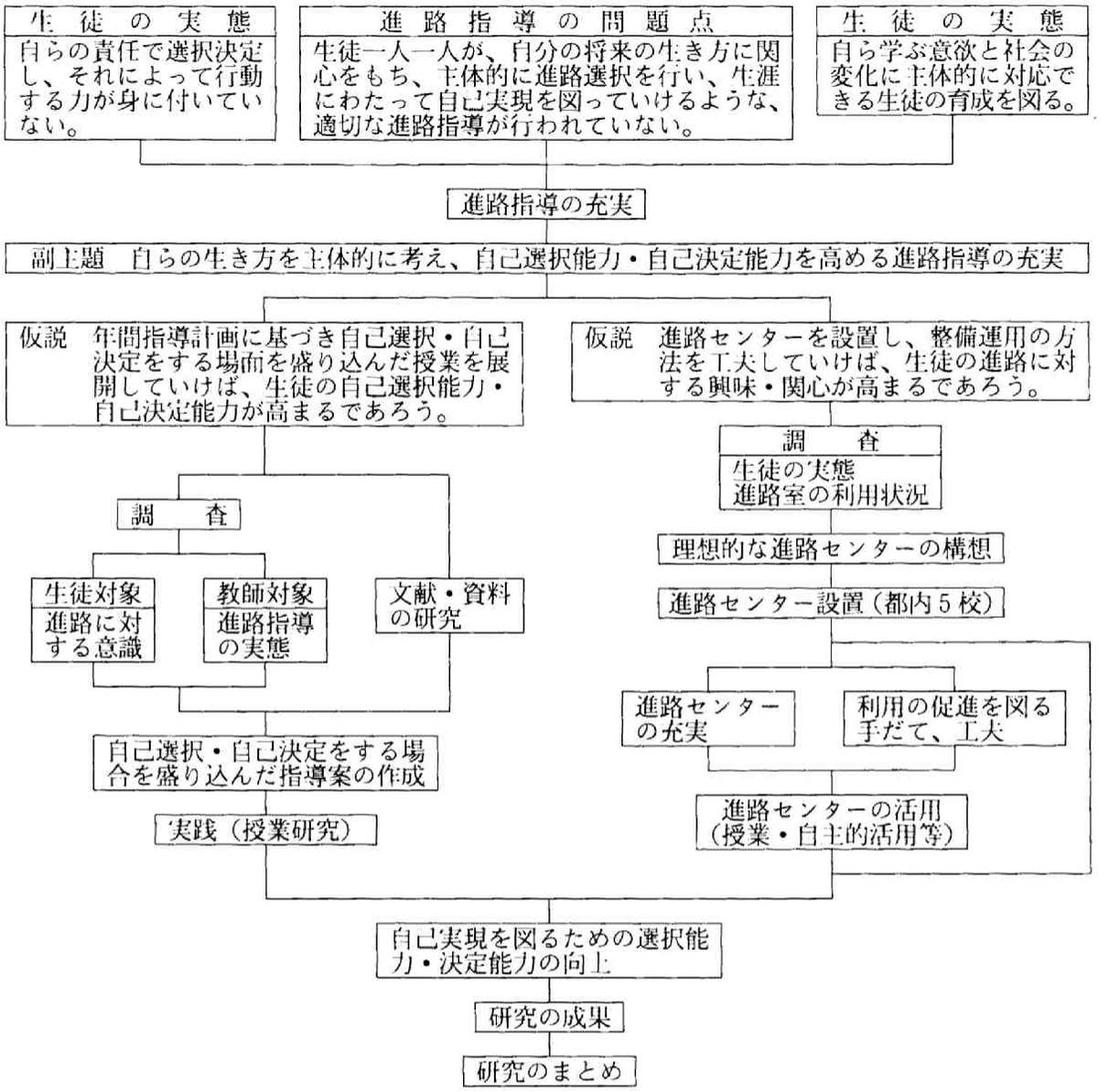
ア　進路センターの活用の実態と、利用についての意識調査をする。

イ　理想的な進路センターを模索し理想的な活用方法を探る。

ウ　様々な状況に応じた進路センターを設置し、進路センターの活用と運営方法の検討をする。

エ　進路センター設置後の実態と意識調査をする。

3　研究の構造



4　研究の内容

(1)　年間指導計画に基づいた授業の工夫

ア　仮　　説

本分科会では、生徒の進路に対する自己選択能力・自己決定能力が身に付いていないのは、進路の年間指導計画に原因があるのではないか、もしそうならばもっと実践しやすい指導計画のモデルプランを考えよう、ということで研究を始めた。ところが、都内約50校の今年度の年間指導計画を集め分析してみると、どの学校にも啓発的体験学習などを積極的に取り入れた３年間を見通した計画があることが分かった。そこで、仮説を次のように変えて研究を進めることにした。

年間指導計画に基づき自己選択・自己決定をする場面を盛り込んだ授業を展開していけば、生徒の自己選択能力・自己決定能力が高まるであろう。

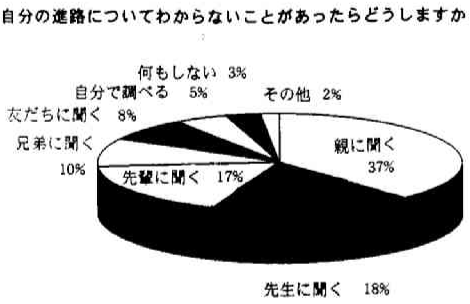
イ　実態調査

研究を進めるに当たり、まず都内５校の１～３年生481人の生徒に対して、進路に対する意識や自己選択能力、自己決定能力についての調査を行った。さらに、128校の進路指導主任に各学校の進路指導の実態について調査した。

(ア)　結果と分析

①　進路についての情報収集の方法

自分の進路について分からないことがあったとき、生徒は親や上級生、友だちなどに尋ねて解決しようとする傾向が強い。学年が進むにつれて、「親に聞く」生徒は減少し、「先生に聞く」生徒が増加する。また、「自分で調べる」生徒は少ないが、学年が進むとやや増加している。

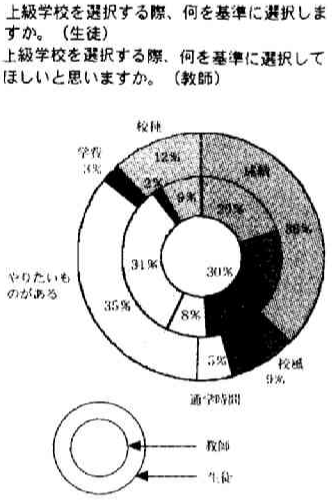


②　部活動や選択教科の選び方

６割強の生徒が、部活動や選択教科を「自分の意思だけ」で決めている。部活動での割合は学年進行に伴って増えるが選択教科では逆に減る傾向にある。

③　上級学校や職業を決めるときの基準

上級学校を決めるときの基準として、１年生は「やりたいものがある」を１位にあげた生徒が多いが、２・３年生になるとその割合が減少し、「成績」をあげた生徒の方が多い。それに対して、教師は「やりたいものがある」が圧倒的に多い。一方、職業を決めるときの基準としては、多くの教師が「自分にとってやりがいがある」をあげているのに対して、生徒はそれ以外に「自分の特技が生かせる」ことも重要だと考えている。また、「収入の多さ」をあげた生徒も多く、学年が進むにつれて増えている。



④　進路の学習に対する興味・関心

進路についての学習で取り組んでみたいこととして、約６割の生徒が「自分の将来について考える」をあげた。次いで「職業の種類について調べる」「勉強する目的と意義について考える」「自分について知る」の順となっている。「～について考える」「～について調べる」という項目が上位を占めていることから、進路の学習に主体的に取り組みたいと考えている生徒が多いことが分かる。

⑤　進路指導の実態

進路指導に関する学習を、１・２学年では平均して年間６～７時間、３学年では14～15時間行っている。内容としては、１学年で職業調べ、１～２学年で職場訪問、２～３学年で上級学校調べ、３学年で上級学校訪問や、卒業生や上級学校の先生の話を聞くという流れになっている。多くの学校で啓発的体験学習が定着してきているようである。

(イ) ま と め

進路の学習に主体的に取り組みたいと考えている生徒が多い。また、どの学校でも様々な取り組みが行われるようになってきている。しかし、進路に対する自己選択能力・自己決定能力を生徒に十分に身に付けさせるまでには到っていないようである。これは一つ一つの進路の学習の展開の仕方に問題があるのではないだろうか。

そこで、1年生の「自分を知る」という学習を取り上げ、研究を進めることにした。

ウ 授業実践例（第1学年）

1) 題材　　自分てどんな人（自己理解）

2) 題材設定の理由　これから3年間にわたって自己実現を目指し、進路の学習を進めるわけであるが、その第一歩が自分を知る＝自己理解である。自分の長所を発見し、それを大切に育てようとするところから進路の学習が始まる。そのきっかけとして本題材を設定した。

3) 指導計画　第1時　　学年集会で進路学習の意義、自己理解の大切さを指導する。

第2時（本時）　「自分てどんな人（自己理解）」
資料を使って学習する。　1・2・3

第3時　「まとめの学習」
第2時で得た情報から必要なものを選択し、自分像をまとめる。　3・4・5

4) 本時の計画

① ねらい
- 人のよさを見つけるには、様々な観点があることに気付かせる。
- 様々な方向から自分を見つめ直し、自分の長所を発見させる。
- 情報を集める方法について考えさせる。

② 授業展開　指導案（次ページ参照）

③ 評価の観点

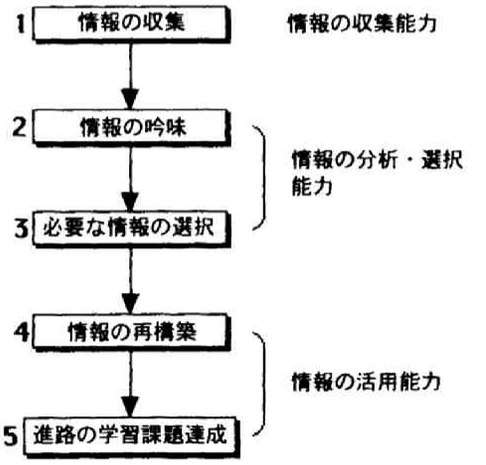
授業の展開で生徒の活動が「選択から決定までの過程」に基づいて行われるように配置し（右図）、それぞれの過程を目で追える資料を用意した。

本題材に関する評価は、以下の2点で行う。

a 生徒が自己選択を行うことができたか。
⇨作業カード1、2、3（次ページ）

b 生徒が選択した情報を基に自己決定することができたか。
⇨作業カード4（次ページ）

自己選択から自己決定までの過程

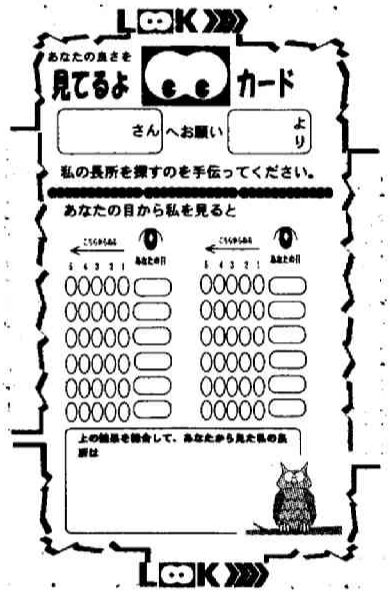


まとめの学習後に生徒が提出した作業カードには、4月の自己紹介カードで自分の長所を書く欄を空欄にしていた生徒もすべて自分の長所をしっかり記入し、自分がこれから大切にしていきたいところを記入してきた。

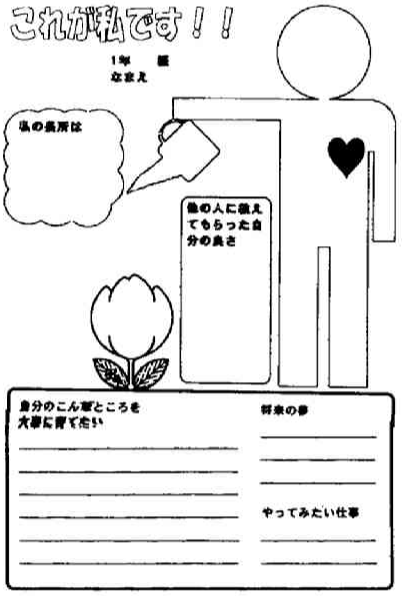
④　指導案

	指導内容	学習活動	教師の働きかけ	指導上の留意点	過程
導入	本時の学習の目標を提示する。 自他のよさを考えるための観点を見付けさせる。	進路の学習の意義、自己理解の大切さを再確認する。 人を誉めるとき使う言葉を発表する。 （班ごとに発表する） 発表した言葉の中からこれから生きていくために必要だと思われる言葉を選択する。 人のよさを考えるための観点を確認する。	例を示しながらなるべくわかりやすく説明する。 黒板に板書しながら進める。 観点別にまとめる。 まとめた観点を示す。	自分の長所を発見することが進路の第一歩になることを理解させる。 なるべく様々な言葉が出てくるように働きかける。 生徒の意見によって選択していく。 人のよさを考えるには様々な観点があることに気付かせる。	1 2・3
展開	資料を使い、自分の長所、友人の長所を発見する。	自分の長所の発見 観点を記入し、自己評価する。 友人に自分の長所を指摘してもらう。 自分の評価してほしい観点をカードに記入する。 カードを記入してもらう友人を選ぶ。	資料を配布し、記入方法を説明する。 人を見るときには様々な方向から見ることの大切さを説明する。 活動についての説明をする。 一人にカードが集中しないように配慮する。 友人を選びきれないでいる生徒に配慮する。	観点については、生徒が選択して記入する。 カードは２～３人に記入してもらうように指示する。	1 1
まとめ	カードの記入内容の分析 次の時間の学習について	集まったカードの評価を比べてみる。 上記の友人以外にカードに記入してもらうとしたら誰に記入してもらうか考える。 カードを準備する。	教師自身のカードを例に分析の方法を示す。 次の時間までカードを記入してもらうように指示する。 まとめの方法を示す。	人によって見方が違うことを気付かせると共に、情報を集めることの大切さを理解させる。	2・3 1

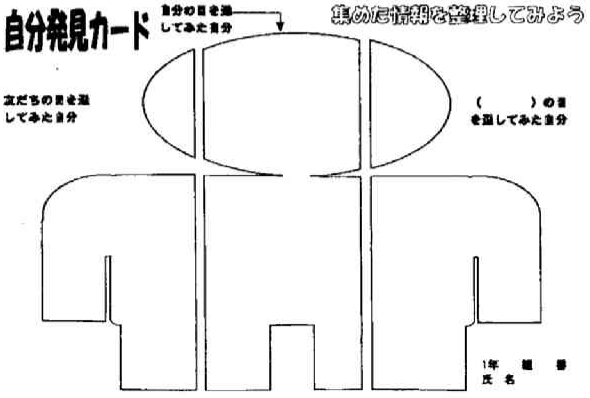
作業カード　1



作業カード　2



作業カード　4



作業カード　3

本研究の主題である「生徒の自己選択能力、決定能力は高まったか」については今回だけの授業では結論は出せない。今後も、進路の学習に限らず、様々な場面で「選択から決定までの過程」をたどることができるような指導を継続していくことで、生徒一人一人の選択能力や決定能力を高めていくことができると考える。

(2) 進路センターの活用とその工夫

ア 仮　説

生徒の進路に対する興味・関心を高めるためには、多くの正しい情報とそれを自由に活用できる場（進路センターなる情報発信地）が必要であると考えた。そこで、次のような仮説を立てた。

進路センターを設置し、整備運用の方法を工夫していけば、生徒の進路に対する興味・関心を高めていくことができるであろう。

イ 実態調査

研究を進めていくに当たり、教員と生徒それぞれに対し、進路室の実態調査を行った。なお、「進路室」とは、進路資料室・進路学習室・進路指導室・進路相談室など、学校によって様々な呼び方をしている教室を総称してつけた。

(ア) 進路室利用について（生徒向けアンケート調査から）

① 「自分の進路について分からないことがあったらどうしますか」

・他人に聞く（親・友達・先生・兄弟・先輩の合計）1年93%　2年84%　3年82%

・自分で調べる …… 1年4.5%　2年7.5%　3年10.6%

② 「進路室を利用したことがありますか」（進路室の設置されている学校の回答）

・3年は41%であったが、1年と2年についてはほとんど利用されていなかった。

③ 「進路室でどんなことができるとよいと思いますか」（複数回答）

・一番多かったのは「上級学校についての資料が見られる」で、1年84%、2年73%、3年67%であった。続いて「職業についての資料が見られる」「上級学校のビデオが見られる」であった。

・その他としては、「コンピュータを利用しての性格判断や適性検査」は1年51%、2年39%、3年58%と、コンピュータ等の情報機器を利用した自己理解の方法に興味があることが分かった。また、「先生と進路の相談ができる」は1年42%、2年38%、3年40%で、多くの生徒が教師と相談できる場の設置を希望している。

(イ) 進路室の活用について（教員向けアンケート調査から）

活用状況に関する記述式の回答の中で、次の3点が主な課題として挙げられる。

① 教室の数に余裕がなく進路室の設置が不可能。（設置されていない学校の回答）

② 資料の整理を含め、進路室の管理が大変。　（設置されている学校の回答）

③ 進路室の利用状況が思わしくない。本来の目的が達成されない。（②に同じ）

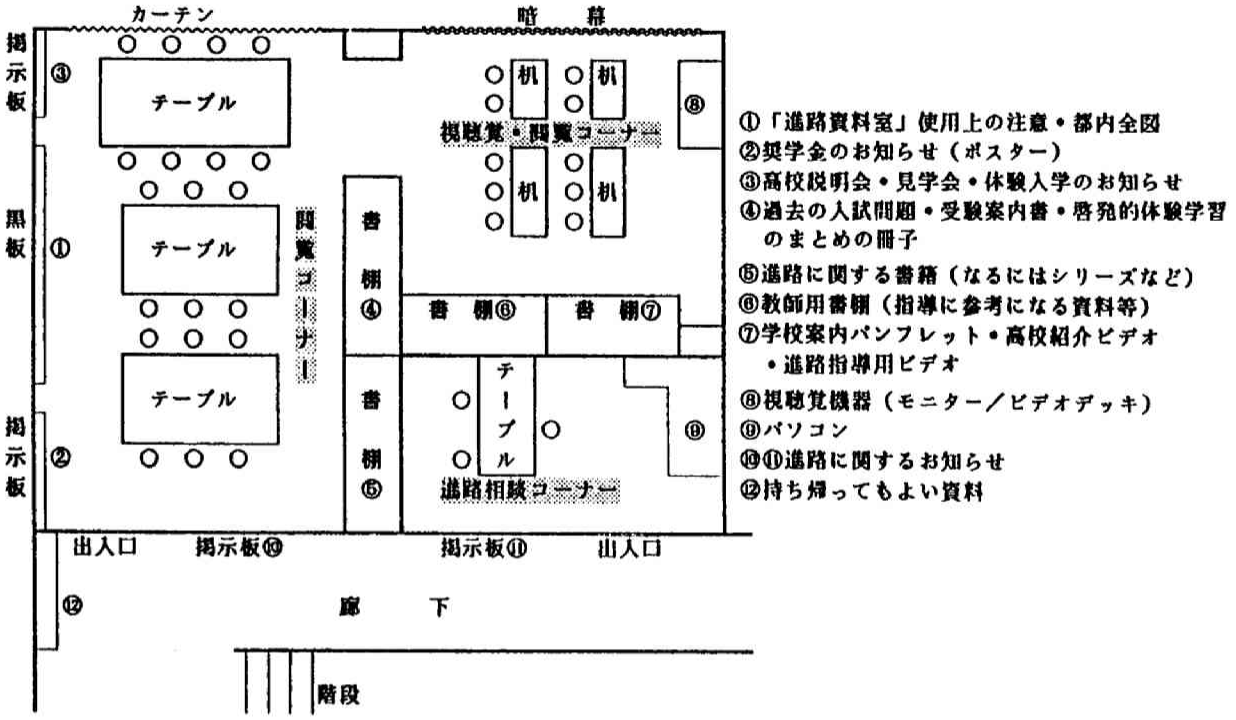
(ウ) 分析のまとめ

生徒向けアンケートの結果からは、生徒の願いに応える進路指導を進める上で、十分な資料の整備と情報提供の場の設定が求められていると考えられる。また、教員向けアンケートの結果からは、進路室設置後の運営上の工夫が進路室の有効活用を左右するものと考えられる。

ウ　理想的な進路センターの構想

実態調査の結果から、生徒の進路学習のために「情報発信地」のような役割をもった進路センターを設置することにした。そこで、理想的な進路センターの条件として次の4点をあげて、試案を作成した。その際、活用しやすい配置について十分考慮した。

・情報収集ができる場であること　　・進路学習ができる場であること
・進路相談ができる場であること　　・教師の指導参考資料等があること



エ　進路センターの設置と実践

実際に進路センターを設置するということは、どの学校においても可能というわけではない。むしろ、教室が確保できないという場合も多い。そこで、研究員の各校でそれぞれの実情に合わせた進路センターを開設し、実践することにした。

実践例	調査時の有無	特　　徴
A 校	有　既に開設	環境的に整備され、利用しやすい状況にある。
B 校	有　既に開設	ＶＴＲを４台設置し、生徒は希望により自由に観ることが可能
C 校	無　７月準備	９月から開室。生徒の係活動を重視している。現在整備中。
D 校	無　４月準備	９月から開室。運用面を学校体制で検討中。
E 校	無　４月準備	図書室の１隅に進路コーナーを設けた。自由に閲覧可能。

オ　進路センターを利用した授業実践例（A・C校）

研究に当たり、2校が同じ題材（「上級学校をしらべる」）で3年生を対象に実践した。A校は進路センターにおいて個別学習の形態で行い、C校は進路センターと隣接の教室においてグループ学習の形態で実践した。

1）目　　標

①　進路センターの正しい利用方法についての理解を深める。

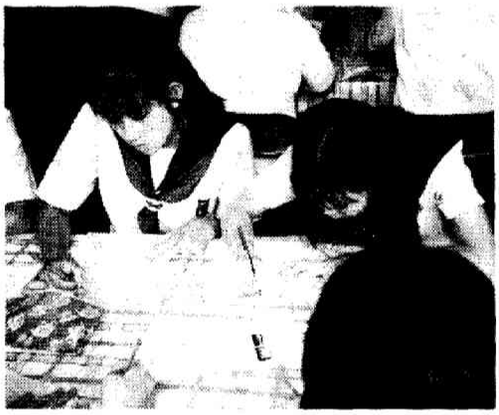
②　資料の中から必要な情報を探すことができる能力を高める。

③　生徒に将来の生き方を考えさせ、進路に対する興味・関心・意欲を高めさせる。

2）指導上の工夫

①　生徒一人一人の興味・関心を生かす支援・助言を行った。

②　課題解決的な学習活動を円滑にするために個別学習とグループ学習の2つの学習活動の場を設定し、それぞれの目標を明確にした。



3）評価の観点

・　進路センターの正しい利用ができたか。

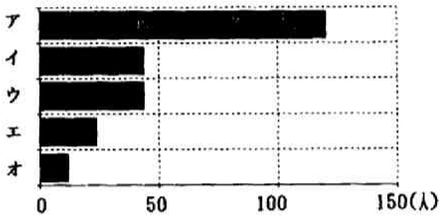
・　必要とする情報を探すことができたか。

4）進路センターを利用しての感想

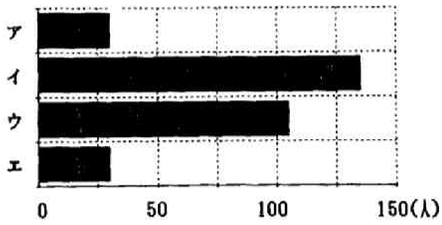
・もっと調べやすくなるとうれしい。　　・もっと資料を増やしてほしい。
・整理されていてとても使いやすかった。
・自分の知りたい学校について詳しく調べることができたので良かったと思います。

5）授業後のアンケート調査（C校の3年生153名で実施）

1　今回の授業は、自分にとってどのような点が「よかった」と思いますか。
ア　高校の種類がいろいろあることがわかった。
イ　高校以外の学校のことがわかった。
ウ　上級学校（高校など）でどんな勉強をするかがわかった。
エ　仕事に就くまでの流れがわかった。
オ　職業についてのことがわかった。



2　これから「もっと調べてみたい」と思うことはありますか。
ア　学校の「科」の違いについて（工業科のこと、商業科のことなど）
イ　各学校ごとの特色について（○○高校、○○学校についてなど）
ウ　入試のことについて（仕組みや問題の内容など）
エ　職業のことについて（仕事の内容や必要な資格など）



6）授業実践のまとめ

・　進路センターを使用した授業により、生徒は様々な資料を自主的に興味をもって閲覧していた。また、事後アンケートからも進路に対する興味・関心が高まったと言えるのではないか。

・　授業を進路センターで行ってから、進路センターの利用人数は多くなり、自主的に利用する生徒が多くなった。また、進路に関する質問や相談も増えた。

カ　昼休み・放課後の時間を通した進路センターの活用

(ア)　進路センター運営上のポイント

昼休み、放課後の利用を進めるためには、生徒が「行ってみたい」「また来てみたい」と思える進路センターにすることが大切である。

具体的には、以下の３点を柱として展開していった。

①　資料の充実

・　常に新しい情報（パンフレット等）を使いやすく整理する。

・　校内での進路学習の成果（職場訪問等）をまとめる。

②　積極的なＰＲ

・　進路だより、ポスターの作成、昼の放送や朝礼等で進路センターの充実ぶりをＰＲする。

③　進路係の生徒が中心となって、進路センターの整備、運営を行う。

・　係の生徒が主体となって活動し、教師が援助することで、「自分たちが作る進路センター」という自覚が生まれ、様々なアイデアを出し合い、進路センターが活性化する。また、利用する生徒にとっても入りやすい雰囲気となる。

(イ)　活用の具体例

運営上の工夫の例をいくつか挙げる。

①　ビデオ上映の定期化

上級学校紹介のビデオの上映を、番組表を作成して行う。（番組編成等は進路係）

②　教師のための資料の集中化

生徒だけでなく、教師もこの部屋に来て、進路指導に関する資料を閲覧できるようにする。（管理は教師が行い、取扱いには十分配慮する）

③　進路センターのスペースが十分でない場合の工夫

施設上の制約でセンターを設置できない場合、進路関係の資料は教室に保管、利用されることが多い。これでは学校全体での資料の活用という面では不十分にならざるを得ない。そのような場合、図書室の一部に「進路コーナー」を設けるなどの工夫をする。

小さいスペースでも資料を集中させると次のようなメリットを出すことができる。

・　「ここに行けば進路の資料がある」という場所ができ、３年間の進路学習を系統的、計画的に進める際の情報発信地としての役割をもたせられる。

・　部数の少ない資料を有効に活用できる。

・　資料を扱う教員と進路に関する相談が気軽にできる。

また、「進路コーナー」の活用と各教室での進路資料の活用とに関連性をもたせるには、進路係が両方の運営に積極的に関わるようにすることも大切である。

(ウ)　利用の実態

利用状況で目立ったことは、どの学校でも１・２年生の利用が少ないことである。これは、進路センターの多くが３年生の教室に近い場所に設置される点（立地面）と、３年生の利用が促進されるほど１、２年生にとっては「行きづらい場所」になってしまう点（運営面）が原因であると考えられる。

5　研究のまとめと今後の課題

生徒が自己実現に向けて自己選択能力、自己決定能力を身に付けていくことは、「生きる力」を身につけていく上でも大きな課題になると考えられる。そこで今年度は、より確かな選択をするための前提となる豊かな情報の提供……情報発信地としての進路センターの在り方と、得た情報を的確に選択、決定する力を身に付ける方法を学ぶ授業の在り方の２つを軸に研究を進めてきた。

(1)　研究のまとめ

ア　年間指導計画に基づいた授業の工夫

(ア)　年間指導計画の収集、分析から次の点が明らかになった。

1)　平成４年度の実態調査によると学年単位で年間指導計画を作成するという学校が70％近くあったが、学校単位で３年間を見通した指導計画を作成する学校が着実に増えてきている。進路指導を進める際の系統的な年間指導計画の重要性が再認識された結果と考えられる。

2)　進路指導にかける時数は十分とは言えないまでも増える傾向にある。特に、１、２年次の時間数の増加が見られる。これは系統的に進路指導が進められてきたためと考えられる。

3)　多くの学校で啓発的体験学習を取り入れた指導計画が作成されている。生徒が自己の将来を考えていく上で必要な情報を得る場面としての体験学習は今後も増えると考えられる。

(イ)　進路に関する意識調査、実態調査から次の点が明らかになった。

1)　多くの学校で啓発的体験学習を取り入れた３年間を見通した指導計画が作成され、進路の学習時間も増えている。

2)　上記1)により多くの情報が提供される状況にあるにもかかわらず、生徒は自分の将来を考えるときに大人に情報源を求めがちであるという傾向がある。これは、情報の収集の方法、情報の処理の方法といった選択から決定までの過程をたどるすべが充分に身に付いていないためと考えられる。

3)　教師は「やりがい」「やりたいものがある」を選択基準の第一にあげているが、生徒は「成績（＝合否）」といった現実的な基準をあげている。合否は生徒が進路を選択する際、避けては通れない問題であるが、安易に合否だけで選択する傾向にないだろうか。合否にいたるまでの過程で生徒の自己実現を促す指導がなされているかどうかが大切になるが、今回の調査では明らかにならなかった。

(ウ)　以上の分析と調査の結果から仮説を立て、自己選択、自己決定をする場面を盛り込んだ授業実践をした。

1)　資料を準備し、選択から決定までの過程を意識した授業を展開することで、生徒のほぼ全員が自己理解を深めることができた。

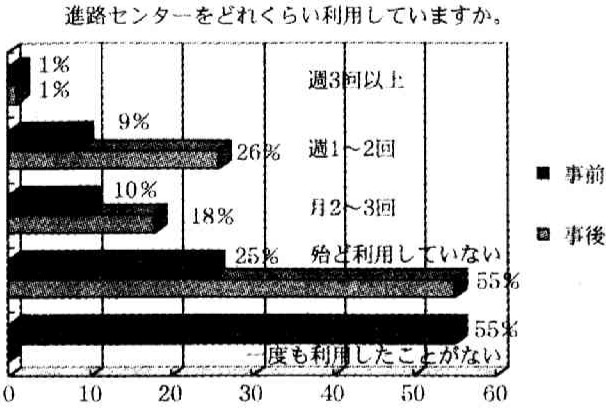
2)　進路の学習の評価は難しいといわれる。本授業実践では、選択から決定までの過程で生徒が提出する資料によって、課題達成に到るまでの過程を評価し、個別に指導できるように工夫した。

イ　進路センターの活用とその工夫

(ア)　進路センター設置前後の意識調査から次の点が明らかになった。

進路センターを開設し、広くＰＲを行ったところ、３年生では、事前には55％もいた「一度も利用したことがない」生徒が、全くいなくなるなど、利用状況に顕著な変容が見られた。

3年生の利用状況



また、関心の薄い生徒が多かった１・２年生については、利用状況に大きな変容は見られなかったものの、「３年生の階だと行きづらいので、学年ごとに設置してほしい」「利用できる曜日を学年ごとに決めてほしい」などの要望が多く出された。１・２年生についても進路に対する興味・関心が高まったものと考えられる。

(イ)　進路センターの在り方と管理運営方法について

意識調査を基に、理想的な進路センターを構想し、各学校での取組みを進めた。その過程で、空き教室やスペースの問題、設備面の問題、学年間の生活指導上の問題など、様々な問題が持ち上がってきた。そこで、まず、各学校の実情に合わせた進路センターを設置し、管理運営する方法を工夫することが大切であると考え、実践した。

３学年を中心に進路センターを活用した授業を行った結果、生徒が自主的に利用する回数も増え、「もっとコンピューターやビデオを増やしてほしい」「いつでも相談できるように先生がいてほしい」などといった要望が多く出されるようになった。また、係生徒が行ったＰＲ活動を通しても「自分たちの部屋」「身近な教室」という意識が生まれ、進路センターへの関心が高まった。

(2)　今後の課題

進路センターを設置し、情報を提供していくことは、生徒の進路に対する興味、関心を高める上で大きな役割を果たす。今後、生徒が主体的に情報を求める進路学習を進めるために、以下の点について研究を深めていきたい。

1)　学級活動での進路指導の授業において、生徒が進路センターを情報の収集・分析のために活用するように、授業と進路センター利用との関連をさらに明確化すること。

2)　設備や資料の充実及び全校体制での管理の運営方法をさらに検討すること。

3)　生徒の進路係を設けて進路センターの企画運営への参加を図るなど、３年生中心ではなく、全生徒が利用しやすい体制を整えること。

4)　進路相談の充実にも目を向け、生徒の多様な要望にこたえられるよう研修を深めること。また、このようにして得た情報を生徒の自己選択、自己決定の過程の中で生かし、選択能力、決定能力を高めるために、日々の授業の中で前述した過程を意識した授業を１学年から継続的に行っていくことが、今後の課題である。

Ⅲ　生活指導分科会の研究

生活指導分科会副主題

自分のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒の育成

1　副主題設定の理由

生徒の日常生活をつぶさに観察すると、多くの生徒は友達との遊びや交流を大切にしたいと願っているものの、対人関係でストレスをつのらせていることや、日ごろの多忙さなどから、心のゆとりを減じている様子がうかがわれる。これは、私たちの生活は豊富な情報や多様な価値観に取り巻かれ、社会の変化が急激であることや、集団での遊びや自然体験、社会体験の減少、人間関係の希薄化などが原因と考えられる。

また、生徒のなかには、自力での解決を迫られるような課題に直面したとき、その解決方法や表現に、根拠や論理性が不足している者も多い。また、他者とのかかわりが少なく、特定の情報や価値を安易に受け止め、自分のよさや可能性に自信をもてないなどの姿も見られる。

これまでの生活指導は、ともすると生徒に規則やルールを遵守することや、問題行動等への対応に多くの時間と労力が費やされてきたという指摘がある。

そこで、本研究では、次の四項目を「生活指導の観点」と仮定し、各教科の学習活動や特別活動へ意図的に位置付ることが必要であると考え、これを検証することにした。

①課題解決能力を身に付ける。
　・課題選択（自己決定）→課題解決（自己責任）→自己評価、相互評価
②成就感・達成感を実感できる。
③共感的なかかわりを体験できる。
④自己存在感を実感できる。

すなわち、生徒が課題を自分のものとして受け止め、自らの役割を自覚し、責任をもってその解決に迫る過程で、成就感・達成感を実感できるものと考える。そして、自己決定と自己責任の感覚や行動力を高められるように配慮することによって、共感や成就感、自己存在感を実感し、自らの課題に積極的に向き合い、たくましく生きる生徒の育成につながるものと考え、本副主題を設定した。

2　研究の方法

本研究では、生徒一人一人が学習活動等において、自らの役割や追究する課題を選択し、責任をもってその解決に当たる過程で、自己決定と自己責任の感覚や行動力を身に付けることができる生活指導の在り方を追究する。

(1)　生徒の学校生活における満足感や成就感などを「実態調査」で把握

(2)　授業の工夫と仮説に基づいた授業の展開

ア　学習指導等において自己決定の場面設定や、学習活動の記録をもとに、生徒一人一人が、自ら取り組む課題を確認したり、課題解決に迫る指導方法を工夫する。

イ　小集団による学習活動を工夫し、生徒相互に課題追究の成果を説明したり、討議したりすることを通して、自己存在感を実感できるような指導方法を工夫する。

ウ　自己評価や相互評価の充実を図るための情報の提供の方法を工夫する。

(3)　課題解決能力を高め、生徒の主体的な活動を促す指導方法の工夫

(4)　仮説の分析及び考察

3　研究の構想

副主題：　自分のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒の育成

生徒の実態
①友達との遊びや交流を大切にしたいと思っている。
②対人関係にストレスを感じる生徒が多く見られる。
③多忙感で疲れ、心のゆとりがなくなってきている。
④自己責任の感覚が十分育っていない。
⑤正当な自己主張が不得手である。

目指す学校像
①楽しい学校（生徒が存在感、満足感を味わえる学校）
②安全な学校（安心して生活できる学校）
③活力のある学校（学んだことに自信を持てる学校）

目指す教師像
①指導方法を工夫する教師
②生徒を深く理解する教師
③組織として教育活動を進める教師

目指す生徒像
◎互いに尊重し、励まし、認め合える生徒
◎身近な問題や課題に対し、自ら向き合い解決できる生徒

研究仮説
☆　各教科の学習や特別活動において、学習活動における生活指導の観点を意図した指導を展開することによって、生徒は自らの課題に対し意欲的に向き合い、自分のよさを伸ばし、たくましく生きていく意欲と能力を身につけることができるであろう。

生活指導の観点
1、課題解決能力を身につける。
　（課題選択（自己決定）→課題解決（自己責任）→自己評価、相互評価
2、成就感・達成感を実感できる。
3、共感的なかかわりを体験できる。
4、自己存在感を実感できる。

学習指導の工夫

課題の発見 ← 情報の提示（教師）
↓ ← <追究する課題の明確化>
課題の選択 ←→ 自己決定
学習活動
←<課題追究の役割と責任>‥‥
←<協同して課題の追究>‥‥‥
←<相互に発表、教え合い>‥‥
→<正当な自己主張>‥ 表現力
自己評価 ←→
自他の尊重
↓
課題の解決 ←→ 達成感、成就感 ←→ 共感的関係
<評価>→ ↓
自己責任 → 責任ある行動 ←←←

生徒の主体的な活動

課題の発見 ← 情報の提示（教師）
課題の提起（生徒）
↓
課題の整理 ←→ 教職員の共通理解
討議・決定
←<ディベートや小集団による討議>‥‥‥
←<課題解決の方策の発表>‥‥‥
←<正当な自己主張>‥ 表現力
→<集団としての意志決定>
自己評価 ←→
自他の尊重
↓
課題の解決 ←→ 達成感、成就感 → 共感的関係
↓
実　践 ← 生徒の自発的な活動 ←←
<評価>→ ↓
自己責任 → 責任ある行動 ←

4　研究の内容

(1)　アンケート調査から見た生徒の実態

ア　調査の目的

自分のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒の育成を図るには、課題解決能力、成就感、達成感、共感的体験や自己存在感をもたせることが必要であると考えた。その観点から、生徒の学校生活に関する意識調査をした。

イ　アンケート調査の概要

①　グラフＡでは、「友達との遊びや交流」が８割以上になっている。生徒は生徒同士の触れ合いや、教科の学習以外の教育活動を主に楽しいと感じていることがうかがわれる。しかし、「先生との触れ合い」「学校での勉強」「生徒会活動」が極端に低い。この点を伸ばしていくことが、必要であることがわかる。

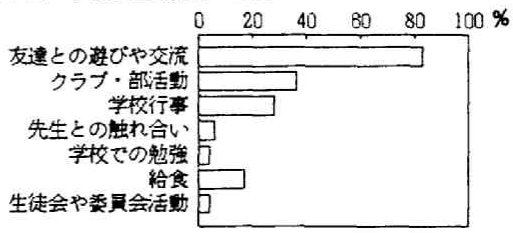
②　グラフＢでは、「成績のこと」(49%)、「授業のやり方や進み方」(41%)、「先生のこと」(23%) の順である。この中には、生徒自身が集中できず、他人に引きずられるといったことに原因があり、自己の責任に気付いてないことが多い。以上の結果から、意欲的な学校生活を送るためには成就感、達成感、自己に責任をもたせる授業の工夫改善が必要であることがわかる。

③　グラフＣでは、「とてもある」「ある」と答えた生徒が８割以上であった。学校生活に於いて、多くの生徒がストレスや疲れを感じていることがわかる。

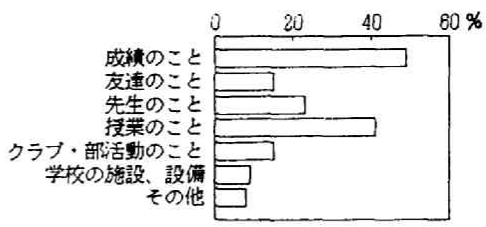
④　グラフＤでは、「先生や親にしかられたとき」(30%)「友達関係」(21%)、次に「言いたいことが言えない」(17%) となっている。生徒は、対人関係がうまくいってなかったり、相手にうまく表現できないことでストレスを持つようになることがわかる。このことから、表現力をつける必要があるといえる。

⑤　グラフＥでは、「睡眠不足」(19%)、「時間にゆとりがない」(39%) である。生徒は、時間にゆとりがなく、あわただしい生活をしていることも推測できる。

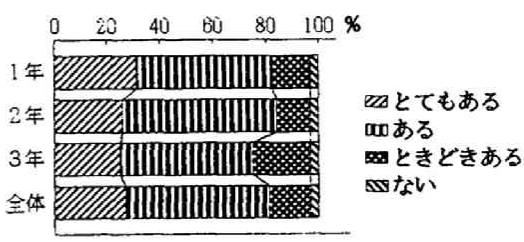
グラフＡ　学校生活で楽しいこと



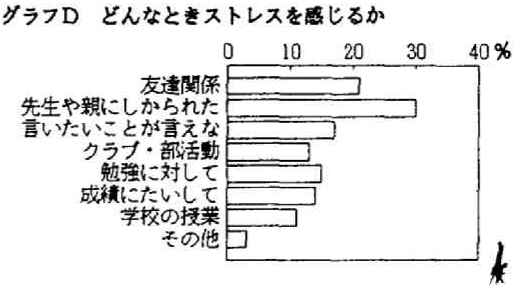
グラフＢ　学校生活で不満なこと



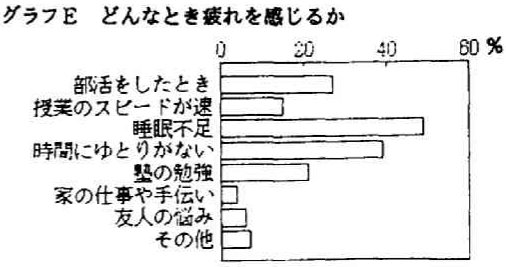
グラフＣ　ストレスや疲れを感じますか



グラフＤ　どんなときストレスを感じるか



グラフＥ　どんなとき疲れを感じるか



(2) 具体的な実践例

ア 生徒が役割と責任をもって取り組む学習指導の工夫（ジグソー学習）－社会科「歴史的分野」

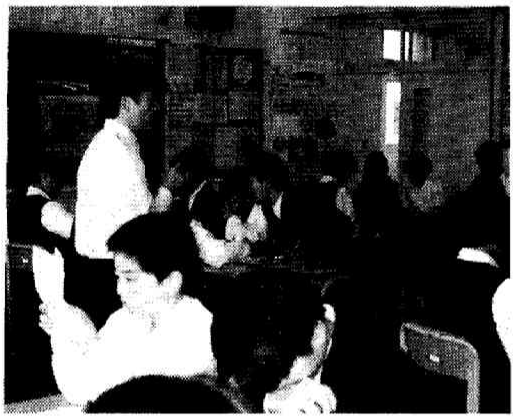
(ア) ねらい

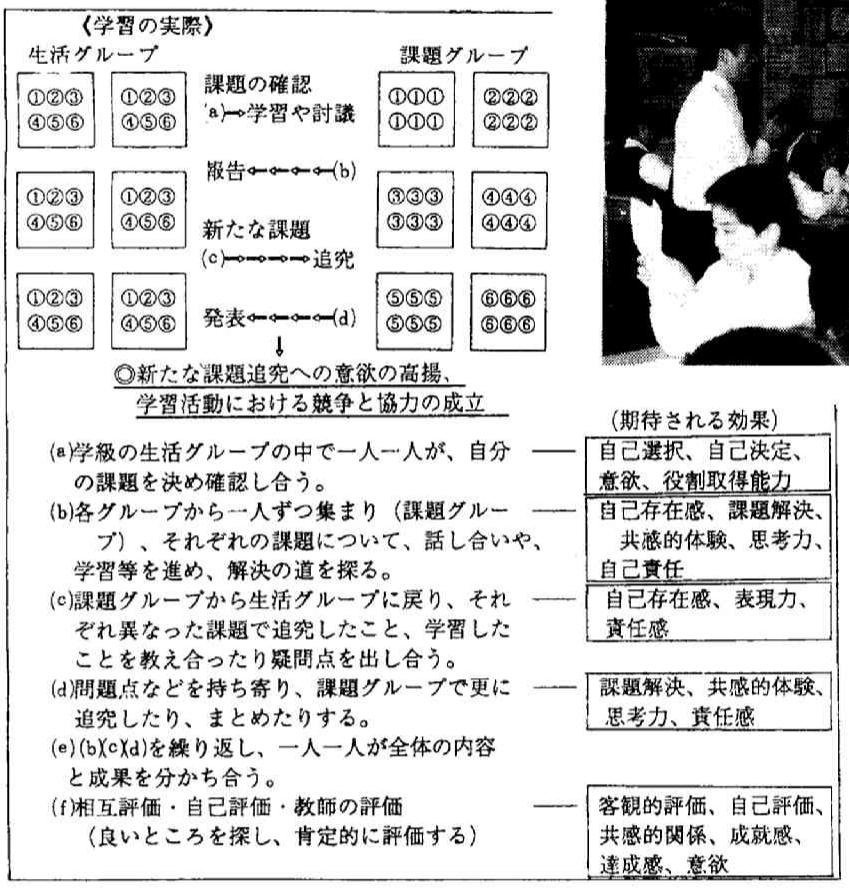
① 自己決定の場を設け、役割を責任を持って遂行することを通して、自己存在感を感得させる。

② 協同的な環境のなかで、仲間同士で学びあうことにより、共感的な関係を養う。

③ 相互評価を通して他者に対する肯定的な感受性を高め、成就感・達成感を実感させ、さらに諸活動への意欲を高めさせる。

(イ) 指導の工夫と期待される効果





(ウ) 学習の流れ（単元名「武家政治のはじまり」平安時代と鎌倉時代の文化と生活）

各時代の文化や生活を扱う時間は、異なる二つの時代を対比し、生徒一人一人が課題を分担し、追究する学習活動（ジグソー学習）を展開した。

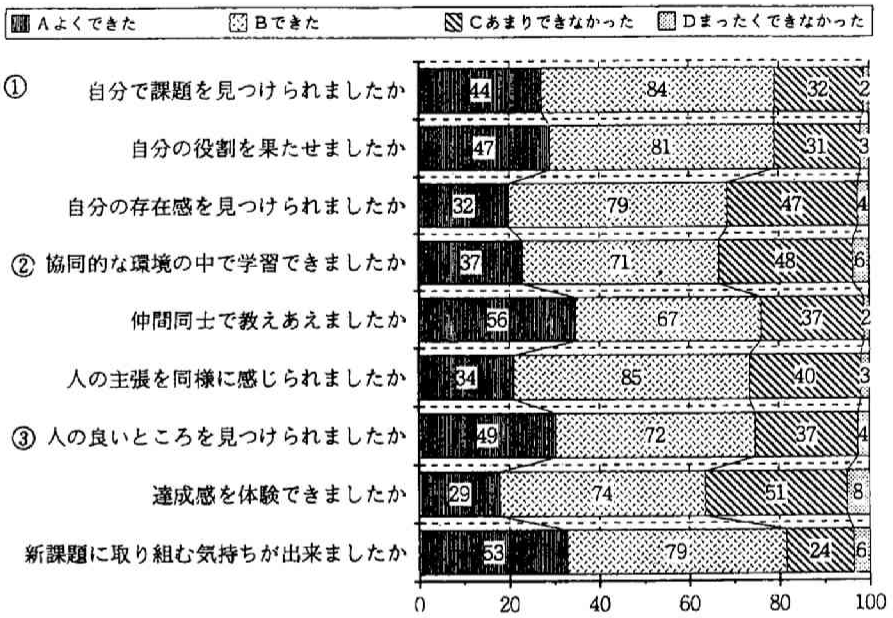
・1時限目…二つの時代の特色について概観する。住居・建築・絵画・文学・宗教・遊び等の学習課題を設定し、興味や関心をもとに課題を選択する。同じ課題を選んだ生徒同士が、課題グループをつくり、情報を集め討議する。

・2時限目…生活グループで、学習したことを発表する。疑問点を課題グループに持ち寄り、更に追究する。生活グループに戻り、疑問点の追究したことを発表する。相互評価を通し、お互いの努力やよさを認め合い意欲を高める。

(エ) 生徒の自己評価や感想

学習カード及びアンケートを用い、ねらいが達成できたか検証した。

〔学習カード（評価項目）アンケート集計の結果　1年生5クラス162名〕



〔アンケート・ジグソー学習についての感想〕

生徒	・一つのことを責任を持ってできた。普通の授業より友達の発表の方が頭の残った。 ・みんなに発表することで、発表の力がついたと思う。 ・友達からほめられて嬉しくなり、やる気がわいた。
教師	・生徒一人一人が自分の役割を認識し、生き生きと意見交換をしていた。 ・国語では、場面に応じた主人公の心情変化をいくつの部分に区切って考えさせられる。
保護者	・友達同志で意見を出し合っていて、とっても良かったと思います。 ・受け身の授業に慣れているので、これからも今日のような授業を続けて下さい。

(オ) 考　　察

この実践において(ア)のねらいを、アンケートの結果をもとに以下にまとめる。

① 多数の課題を設けることによって、自己選択する姿勢を強く持たせることができた。また自己選択した課題なので、責任感をもち、役割を果たす姿勢がみられ、さらに教え合うことにより、存在感を得たようすがうかがわれる。

② 同じ課題を選択した生徒同士なので、協同的な環境の中で追究できた。また発表を通して、教え合う姿勢をもたせることができた。そして生徒同士で、協同して疑問点を追究することにより、共感的な関係が深まった。

③ お互いの取り組みを相互評価することによって、生徒同士が肯定的に受け止め合う様子が見られた。さらに、多くの生徒が新たな課題に取り組んでいくという意欲を高めさせることができた。このことは、肯定的な評価による成就感を感得していることに起因するものと思われる。

また、このような学習指導法をより効果的に展開するには、自分の行為に自信と責任をもたせる必要がある。そのためには、学習成果を断片的な知識にとどまらせないように、それぞれの学習内容を統合し、総合する方法を工夫する必要がある。

イ　生活指導の観点を生かした学習指導の工夫　－保健体育（バスケットボール）－

(ア)　ねらい

①　生徒自身が、自己の特長や能力にあった到達目標や理想像を設定する。

②　目標を達成するために、一人一人が班員と協力し、課題を解決する。

③　各自の特長や能力を生かし、チーム力の向上に役立つことにより、充実感や達成感、自己存在感を実感し、生徒相互・教師との間で共感的な体験と、かかわりができるようにする。

④　授業を通して高められた能力や見方・考え方を、日常の生活に生かし、互いに協力し、学ぶ喜びを分かち合えるような人間関係を培う。

(イ)　学習の進め方

①　オリエンテーション

a　班組織（チーム）づくり

b　メンバーの特長を分析

c　めざすチーム像を設定

d　課題練習メニュー作成

②　ためしのゲーム

a　試合方法の説明と確認

b　スコアー記入練習（全員）

c　スコアー分析練習（全員）

③　チーム別の課題練習

・スコアー記入

④　スコアー分析と課題の明確化

<table>
<tr><td rowspan="2">単位時間の流れ</td><td colspan="15">単　元　の　計　画　（時数）</td></tr>
<tr><td>驟</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td></tr>
<tr><td rowspan="4"></td><td rowspan="4">オリエンテーション・基本練習・組織編成</td><td colspan="13">準備運動（ｽﾄﾚｯﾁ、ﾎﾞｰﾙﾊﾝﾄﾞﾘﾝｸﾞ、ﾄﾞﾘﾌﾞﾙ、筋力ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ）
課題練習（ﾊﾟｽ・ｱﾝﾄﾞ・ﾗﾝ、ｽｸﾘｰﾝﾌﾟﾚｰ 他）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ためしのゲーム</td><td colspan="3">６分ゲーム
同クラス内のチームとリーグ戦
（ｽｺｱｰ記入）</td><td colspan="3">６分ゲーム
対戦相手を替えﾘｰｸﾞ戦
（ｽｺｱｰ記入）</td><td colspan="3">６分ゲーム
対戦相手を替えﾘｰｸﾞ戦
（ｽｺｱｰ記入）</td><td rowspan="2">８分ゲーム
リーグ戦
（ｽｺｱｰ記入）</td></tr>
<tr><td colspan="13">スコアー分析、反省と課題検討
課題練習
整理運動</td></tr>
</table>

NO	プレーの記録 前半	プレーの記録 後半	S 2点	~~S~~ 1点	A 1点	R 1点	C 1点	P ±0	T ±0	合計
4	S~~S~~ ~~S~~RA	CPRSA~~S~~	2	3	2	2	1	1	0	10
5	ARCSS~~S~~	~~S~~ACP	2	2	2	1	2	1	0	9
6	~~S~~ ~~S~~R	PS	1	2	0	1	0	1	0	4
7	SCR ~~S~~	A~~S~~~~S~~	1	2	1	1	1	0	0	6

<スコアー記号>
S……シュートイン
~~S~~……シュートアウト
A……アシストパス
R……リバウンド
C……パス・シュートカット
P……パーソナルファウル
T……テクニカルファウル

(ウ)　反省、課題、教師からのアドバイス

回	日時	反省、課題
4	10／21	組織プレー（ハイポストを使ってのスクリーンプレー）を使えた。声が出ていて、ディフェンスが良かった。まだあわててパスを出している。パスは、Ｖカット、Ｃカット、Ｌカットを使い、リズムを変えてもらうようにする。
ｱﾄﾞﾊﾞｲｽ		●●君をハイポストにして、プレーを組み立てるのは良いことです。ハイポストでの１対１も考えられますが、●●君の能力レベルを考え、対応できるように配慮してください。あれもこれもと言わず、一つ一つのプレーを確実にマスターしていきましょう。 ■■キャプテンの適切な指示どおり、周りの人が良く動いていると思います。

(エ) 学習活動の記録と生徒相互の評価

① 生徒相互の評価のまとめ

番号	氏名	役割を果たす態度	安全への留意	認め誉め励ます態度	練習への取り組み	チームへの貢献度	ゲームでの活用	練習の創意工夫	ルールマナーの知識	合計
11	A	7	10	4	10	11	7	2	5	56
12	B	2	3	6	9	6	5	1	7	39
13	C	14	8	12	13	13	13	9	17	99

② スコアーを基に生徒の活動を分析

番号	氏名	S シュート	⊗ シュートミス	A アシストパス	R リバウンド	C カット	P パーソナルファール	T テクニカルファール	合計	ゲーム回数
11	A	20	17	24	4	15	0	0	80	15
12	B	6	17	1	3	1	2	0	30	14
13	C	24	6	6	5	15	0	0	56	14

(オ) 考察とまとめ

① 生徒は、シュートやゲームに勝つことに喜びや楽しみを求めるが、個人プレーが減少し連携プレーを試みるようになった。また、運動が得意ではないという生徒やバスケットボールに興味はないと言う生徒も積極的に参加できたと評価している。

② オリエンテーションで理想のチーム像を決め、一人一人の特長や能力をチームプレーで生かしながらチームづくりを進めたり、各チームが工夫しながら練習を積み上げた。このことによって、各自のポジションが明確となり、一人一人に活躍の場ができた。また、生徒は、教員が各チームのスコアーに触れながら指導・助言したことや、個別指導したことをもとに次時への課題とし、練習や作戦に生かそうという姿勢が多く見られた。

③ 班長が中心になり、それぞれの目標達成に向け課題を解決していく中で、互いのよいところを認め、励ます態度が育ってきた。班員から「プレーについて非難されなくなり、具体的な指示を与えてくれるようになった」という事例や、プレー中に転倒した選手に対して、「大丈夫か、がんばれ」という声を掛け合う姿が見られるようになった。また、プレーの面では、「個人プレーを改め、仲間を生かしたプレーをすることに努力した」という生徒が増加し、「仲間を生かすことに喜びがある」という感想も見られた。

④ 学習を重ねるに従い、生徒一人一人の活躍の場面が多く見られるようになり、連携プレーも多く見られるようになった。同時に班員同士の人間関係が深まった。さらに、プレーや係りについての自己の役割を最後までやり遂げる責任感と、自分の班以外でも、良いプレーや努力に対して「拍手」や「ナイスシュート」、「ドンマイ」という声かけをする態度が多く見られるようになった。

⑤ 日常の生活では、ここではぐくまれた課題解決能力や、人間関係を円滑にしていこうとする姿勢が見られるようになった。生徒や他の教員の感想は、下記の通りである。

a 人間関係が円滑になり、他の授業でも、勉強を気軽に教え合ったりできるようになった。

b 友達のよいところを見ようとする姿勢が見られ、励まし合えるようになった。

c お互いに問題点を出し合い、よい方向にもっていこうとする雰囲気ができた。

ウ　生徒の自発的、自治的な能力や態度をはぐくむ生徒会活動

(ア)　ね ら い

生徒が、積極的に社会参加する能力や態度を身に付けることができるようにする。そのために、生徒自身が自分たちの生活上の課題を見つけ、よりよく課題を解決しようとする意欲や態度をはぐくむ機会や場面を工夫し、自らの判断や結果に責任をもつことができるようにする。

また、課題解決に積極的にかかわり、生徒一人一人が達成感や成就感を実感できるようにする。

(イ)　指導上の工夫と活動の流れ（体育着の変更について）

学校として、生徒が自らの意志を表明する能力をはぐくむ機会と経験の場とするために、教職員の共通理解を図り、生徒会活動の方針を確認する。

①　体育着の機能性やデザインの面から改善案を各学級から提案する。

・生徒会拡大委員会で議題とするよう援助

②　生徒会本部が体育委員会から各学級での検討結果について、報告を受理する。

→ 自己決定、自己責任

③　生徒会本部がアンケートの作成と調査、集計、分析

アンケート
格好にとらわれず、体育着としての機能性や授業に取り組む姿勢など問う

→ 課題発見、課題解決

④　各学級でアンケート結果をもとに討議する。→ 自己決定、自己責任

⑤　学校として保護者にアンケートの実施

アンケート
体育着の変更の是非、時期、費用、単価アップなどに対する理解

⑥　生徒の意見を尊重し、学習活動や日常の生活の在り方を見直す話合い活動や実践の評価を進める → 達成感、成就感を実感

(ウ)　考察とまとめ

①　本事例は、生徒が体育着の格好ばかりに固執することなく、学習活動や生活を見直すものとなり、主体的にかかわろうとする生徒の姿が見られた。

このことは、生徒が主体的に判断し、より良く課題を解決しようとする意欲を育み、主体的に学校生活の在り方や、行動に責任のある態度をとり、自律的に生活していこうとする人間関係を育てることにつながった。

②　学校の教育目標に即し、教師の適切な助言・指導のもとに、生徒が自発的、自主的に活動することのできるように配慮したことで、個々の生徒のよさや能力を発見し伸ばし、達成感や成就感を実感できた。

③　生徒が、積極的に社会参加する意欲や能力、態度を身に付けられるようにするには、あくまで生徒会活動の主役は生徒であることを再確認する必要がある。また、生徒会活動の指導に当たっては、教師がよき援助者として、見通しと判断をもち、生徒自身が感じたことをみんなで考え、出された意見を大切にして、結論を出すように促す必要がある。

エ　集団の自治活動を導く「話合い活動」－学級、学年の取り組み－

(ア)　ね　ら　い

生徒がより良い学校生活を目指し、主体的に活動していくためには、自ら課題を見付け、様々な意見や考え方を調整しながら、その課題を解決し、その結果に対して責任をもつことのできる教育活動を進める必要がある。

そこで、ディベートの手法を用いて、生徒が課題を明らかにしたり、討議を通して、所属する集団の意思を決定し、生徒一人一人が自己責任の感覚をもち、行動できるようにする。

(イ)　指導上の工夫

①　「自主的な時間管理は、チャイムで行動する生活からは生まれないのではないのか。」という生徒の思いを高め、討議主題「主体的な生活、自主的な時間の管理ができれば、学校にチャイムは不要か、それとも必要か。」について討議し、自己決定を促す。

②　生徒が課題を掘り起こし、解決する手段として「自己内ディベート」を取り入れる。

③　模擬ディベートを行い、進め方や立論するために必要な情報収集の仕方を学習する。

④　討議を通して、実践目標を決定し、自己責任の感覚と行動力を高める。

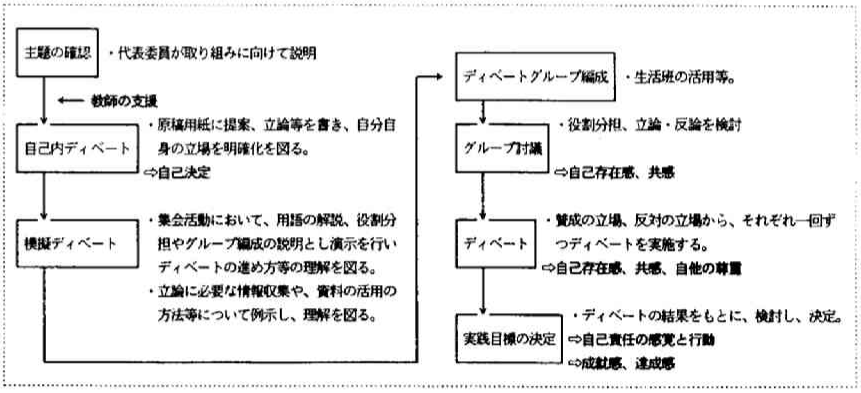
(ウ)　活動の流れ

①　教職員の取り組み

・校内研修として、ディベートによる授業を行い、実践のための方策を研究する。

・生徒の自主的な生活を支援することを目指し、ノーチャイムのねらいを共通理解する。

②　生徒の活動



(エ)　考察とまとめ

①　生徒一人一人が、「自己内ディベート」で、主題に関する課題を掘り起こし、それぞれの立場で、考え、立論していく過程で、問題解決能力を身に付けるとともに、自己決定や自己責任の感覚や行動力を高めた。

②　多様な立論や反論を通して、他者の意見を受けとめ、所属する集団の意思を決定する過程で、自己存在感を実感し、共感的な関係がはぐくまれた。

③　「自己内ディベート」や「模擬ディベート」で、主題に対する理解の深まりや課題が掘り下げられ、論旨に関係のない論議などは見られなかった。

オ　ボランティア体験学習－１年　特別活動・道徳－

(ア)　ね　ら　い

①　ボランティア活動を教育課程に位置づけ、意図的・計画的に行うことにより、生徒が様々な人とのふれあいを通して、人間としての生き方や学ぶことの大切さを実感する。

②　障害のある人や高齢者とのふれあいを通して、共に学び共に生きることを実感することにより、共に社会問題や自分の生き方について考えを深める。

(イ)　指導の工夫

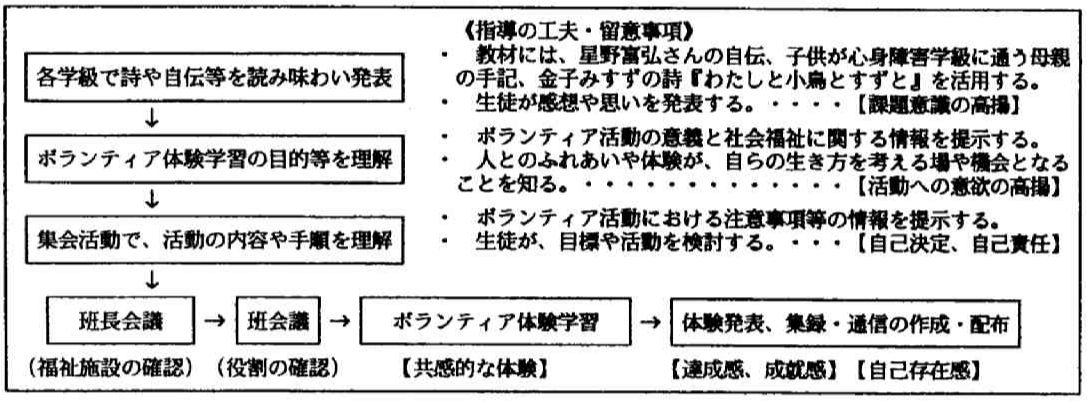
①　自分自身には、自分より弱い者や異質なものとして無関心を装うなど、他者とのかかわりに、偏った見方はないかどうか、生徒自身が自己吟味する過程を大切にする。

②　ボランティア活動で、生徒自身が他者との関わりを通して、自分自身の生き方を見つめなおす機会となるように、道徳の時間との関連を図った。

③　学級活動（将来の生き方と進路の適切な選択に関すること）や、道徳（主として集団や社会とのかかわりに関すること）の時間をまとめ取りし、活動の時間を確保した。

④　生徒が体験や感想を語る機会を設け、ボランティア活動を続ける意欲を高めた。

(ウ)　学習の流れ



(エ)　考察とまとめ

①　意図的・計画的なボランティア活動の実施によって、生徒は自らの生き方を見つめる機会となり、自分の責任を果たすことや、他者の為に役立つことは自分を生かすことにつながることを実感した。また、学級に支持的な風土がうまれた。

②　生徒が、活動のまとめとして発表した感想や体験の内容をもとに手紙を書き、かかわりのあった方々に届けたことがボランティア活動を続ける意欲を高めることになった。

③　人をからかったり、弱い者いじめにつながるような行為が解消された。

④　福祉を身近な社会問題としてとらえる生徒の姿が見られるようになった。

生徒の感想から

今回の体験学習で、わたしは他の人の役に立つ喜びと、人間どうしの暖かい感情を教えてもらった気がします。わたしたちの社会には、もっと障害の重い人やいくつかの障害のある人もたくさんいると思います。
わたしは、これからもそのような人からすばらしい気持ちを与えてもらったり、いろいろと教えてもらう機会がたくさんあるでしょう。今回の体験学習で出会った人は、わたしに宝物をいっぱいくださいました。こんどは自分の中にある宝物も差し上げたいと思いました。今回教えてもらったこの気持ちをこれからの生活に生かします。

5　研究のまとめと今後の課題

(1)　研究のまとめ

①　「生徒が役割と責任をもって取り組む学習指導の工夫（ジグソー学習）」について

小集団による学習活動の一つである「ジグソー学習」を取り上げ、一人一人の生徒が課題を選択し、他の小集団で同じ課題を選択した生徒同士が課題を追究し、その成果を説明したり討議したりすることができるように工夫した。その結果、次のような成果が見られた。

・生徒は、授業を成立させる責任の一端を担い、受け身にならない。
・生徒は、小集団の中で発表することによって、表現する力がつく。
・協同的な環境の中で、互いのよさや能力を認め合うなど人間関係づくりに役立つ。
・課題の自己決定や課題を達成した充実感を実感し、自己責任の感覚が育つ。

以上のように、ジグソー学習は生徒が、自ら物事を総合的に捉え、既有の知識や経験を利用し、問題解決のための更なる自己表現・情報伝達の力を身に付けることができる。このことは、本研究の生活指導の観点を生かした教科指導の具体的な方法と考える。

②　「生徒指導の観点を生かした学習指導の工夫」について

オリエンテーションで各チームの理想像を描かせたり、各チームのスコアーにゲームの内容と課題を明らかにしたりして、学習活動を展開できるように工夫した。その結果、次のような成果が見られた。

・チームで協力し、一人一人のよさや能力を生かしたプレーができるようになったことでチームの中で自己存在感を実感できる。また、スコアー分析をすることによって具体的に自己存在感を確認でき、次の学習への意欲が高められた。
・バスケットボールの授業を通してはぐくまれた能力（自己決定、課題解決能力）が、日常の生活の中でも生かされ、よりよい人間関係づくりにつながった。

③　ま と め

自分のよさを伸ばし、たくましく生きる生徒を育成するためには、問題行動への対処やルールや規則を遵守するよう指導するにとどまらず、学校生活の中心である授業を積極的に改善する必要がある。学習指導は、生徒が自ら課題を設定し、解決し、満足感や成就感を実感できるものとなるように工夫したことで、生徒自身が自己イメージを高めることができた。

特別活動等においても、自己決定の場面を設定することなどの工夫から、生徒は自己責任の感覚や行動力を高めることができた。よって、各教科の学習や特別活動において生活指導の観点を意図した指導を展開していきたい。

(2)　今後の課題

①　生活指導の観点を生かした授業を行うに当たっては、一教科だけでなく、学校全体の共通理解と実践が必要である。さらに、生徒のよさや努力したことなどの情報を共有することが大切である。

②　小集団を生かした指導（ジグソー学習）は、継続的な取組みが必要である。また、各教科・領域の特質や内容に即した学習指導の展開の方法を工夫することが大切である。